

## 1 自己評価及び外部評価結果

## 【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4077300244		
法人名	有限会社 ひがし		
事業所名	グループホームたかみ		
所在地	うきは市浮羽町高見1750-1		
自己評価作成日	令和2年7月21日	評価結果確定日	令和2年11月12日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。

基本情報リンク先	<a href="http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/40/index.php">http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/40/index.php</a>
----------	---

## 【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	株式会社アール・ツーエス		
所在地	福岡市南区井尻4-2-1関ビル1F	TEL:092-589-5680	HP:http://www.r2s.co.jp
訪問調査日	令和2年8月25日		

## 【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】(Altキー+enterで改行出来ます)

個々の利用者に合わせて、体調や状況により柔軟な対応を行える体制が整えられている。利用者1人1人の希望を最大限にいくみ取れるようにしている。

「グループホームたかみ」は筑後平野と耳納連山に囲まれた閑静な土地にある2ユニットの施設で、横のJRの線路は少し前まで「ななつ星」が走っていた。母体法人は市内にてもう一つグループホームを運営する。開設して14年目になり、地域や行政との結びつきを大事にしてきたが、本年に入り、新型コロナウイルス感染拡大の懸念から、従来行われていた文化祭などの数々の行事を相次いで中止とせざるを得なくなり、日常的にも家族の面会や外出レクなどさまざまな場面で制約が生じている。その中で、地域や行政とのつながりは継続し、事業所内でも、散歩に行ったり、作品を作ったり、という日課は続け、庭で収穫する果物を食べたり、という新しい試みも取り入れ、可能な限りこれまでの生活が続けられるよう、職員も一丸となって支援を続けている。緊急時や看取りに対する対応は続けていく事で、地域を支えようとしている。元通りの生活に戻る日には、改めて活躍が期待できる事業所である。

## V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～57で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
58 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:25,26,27)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	65 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,21)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
59 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:20,40)	<input type="radio"/> 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	66 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,22)	<input type="radio"/> 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
60 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:40)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	<input type="radio"/> 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
61 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:38,39)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
62 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:51)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	69 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
63 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:32,33)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	70 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
64 利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:30)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果					
自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	各ユニットのホール・事務所に理念を提示している。又、会議などの時に全員で唱えて理解を深めている。	6年ほど前に、理念の見直しを行い、「グループホームたかみ」の名前から「たのしく、かんしゃ、みんなで～」とわかりやすいものに改めた。事業所内の掲示の他、定例会に唱和するなどを通して、理念や行動指針の共有を図り、判断に迷った時には理念に立ち戻って行動ができるよう、意味を深めている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	文化祭・敬老会・もちつき大会など季節に合わせたイベントを開催し交流している。2020年はコロナの為に中止。 コロナ禍、施設内での内々のイベント・花火大会・運動会などは実施している。	地域の方も楽しみにされているほどの文化祭をはじめ、敬老会、餅つき大会など、地域の方と一緒にイベントについては、本年度はコロナウイルス感染拡大を懸念して中止し、作品を作るだけにしたり、事業所の室内で小規模で行ったり、というスタイルに軌道修正。ボランティアの受入にも制限が生じている。散歩の際の地域住民との会話や、毎月の「たかみ便り」の発行(公民館に掲示したり回覧板で閲覧する)などを通して、できる範囲での交流の支援を行っている。	コロナウイルス感染拡大の懸念が払拭されるまでにはまだ時間を要すると思われるが、その期間であっても、工夫をして可能な限り地域との交流を図り、また再開を目指して構想を練り準備していただきたい。日常的に地域の方の立ち寄りや介護相談を受け入れられるような開けた施設づくりを目指していたと聞くので、やがては実現できるよう、期待する。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域の方々を巻き込み、徘徊模擬訓練などを行い認知症の方への理解を深めている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2ヶ月に1回の運営促進会議の実施。今年に入り4月6月の会議が開催できなかったが7月に開催。委員の方々の意見を取り入れサービス向上をはかる。	本年はコロナウイルス感染拡大の懸念から、日程は不定期になった時期があったが、それでも事業所(事務室)での開催の際には、家族、市職員、地域包括、民生委員、交番の巡査(利用者の徘徊の事の話がある時)などが参加した。事故や状況の報告などの他、事業所への頻回ないざら電話に対する対応などのアドバイスなどのやりとりがなされている。議事録は事業所内にて開示ができ、また関係者に配布し情報を共有している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営促進会議に市の職員の方にも参加頂き、意見を参考にしている。	市・包括の職員が運営推進会議に出席されており、その際は他の参加者から行政への要望を上げる場にもなっている。空室情報は毎月や随時市へも報告し、入居紹介を頂くことがある。介護申請時の窓口訪問などを通して担当者とも顔見知りになり、気軽に相談することができている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束の内部研修を行っている。職員への啓発に努めている。	防犯上の管理のため昼・夜とも施錠している。施設傾向のある利用者に対して、防犯カメラの設置、職員の見守り等により対応することで、出ていこうとする人はいない。地域のグループホームや交番など地域との協力関係を築いている。研修は事業所内で毎月行っており、職員も認識を共有、転倒防止のためのセンサー設置はあるが(3名)、現在は身体拘束にあたる対応は行っていない。	

R2.8自己・外部評価表(GHたかみ)確定

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	身体拘束をはじめ虐待に関する内部研修を行い、職員全体で防止に努めている。		
8	(6)	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	人権・権利擁護に関する研修に年1回全員が受けられる体制づくりを学んでいる。	現在2名の成年後見制度利用者がおり、職員は勉強会を通しての知識に加えて、実際の制度活用や後見人との接触を通して理解を進めている。事業所としては利用者側から求めがあった場合に備えてパンフレット等は常備しており、必要時には基本的に施設長が関わって、地域包括などの支援を受けながら説明や手続を行う体制が整っている。	
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	重説は必ず読み合わせをして、その都度質問を受け付け、ご納得の上で契約に至っている。		
10	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営促進会議にご家族の参加をして頂き、意見・希望の集約を行っている。又その意見や希望に添った介護に反映している。	コロナウイルス感染拡大の懸念から、家族の面会も自粛されてはいるが、それでも訪れた場合にはなるべく会話、面談の機会を持つようになっている。来訪が難しい遠方の方とは手紙(毎月のお便りに個別の通信をつける)や電話などで連絡を取り合う。要望や意見などのすくい上げに努めており、それを職員が共有して日常のケアに生かしている。最近では防災の不安の声が大きかった、と職員より聞く。	事業所開設後14年目となり、コロナウイルス感染拡大の懸念もある中で、事業所としてアンケートをとって、いつもと違うかたちで家族の声を集約してみるのも良いのではないかと。
11	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月に1回の定例会・ケアカンファレンスを開催し意見・提案を聞いている。その都度反映できている。	全体会議(パート職員も参加対象)が毎月あり、欠席者には会議ノートや口頭での伝達で共有する。日頃管理者やリーダーも現場にいて意見も上げやすい状況にあるが、加えて個別面談の機会(ただし正職員のみ)もあって直接話すこともできる。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	年に2回面接を行い、本人に希望や目標を聞き出し、その人に合った目標をもってもらうように努めている。また半年を振り返り、立てた目標の達成具合により賞与への反映を行っている。		
13	(9)	○人権の尊重 法人代表者及び管理者は、職員の募集・採用にあたっては性別や年齢等を理由に採用対象から排除しないようにしている。また事業所で働く職員についても、その能力を発揮して生き生きとして勤務し、社会参加や自己実現の権利が十分に保証されるよう配慮している	男女関係なく採用をしている。その人のもっている能力に応じて給料体系などを考慮している。	10～60歳代までの職員がいて幅広い。定年(70歳)後、パートでの勤務延長もできる。個々の能力や特技を勤務に生かして、生き生きと仕事をしている。上級資格の取得、外部研修への参加にも前向きであり、スキルアップにも努めている。希望の休みやシフトなども考慮されており、また休憩や宿直スペースも確保されている。	

R2.8自己・外部評価表(GHたかみ)確定

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14	(10)	○人権教育・啓発活動 法人代表者及び管理者は、入居者に対する人権を尊重するために、職員等に対する人権教育、啓発活動に取り組んでいる	外部研修以外にも内部研修の機会を増やし入居者様への対応に日々努めている。	事業所内の研修に加え、法人全体の勉強会に参加する(高齢者虐待のDVDを活用した、との話あり)ことで、人権に対する認識を職員は深め共有している。職員は利用者の個性(その人らしさ)を大事にして接するように心がけている。	
15		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	定期的に、その人に合う研修が来た場合、日勤の勤務にして、研修に行ってもらうようにしてる。ほとんどの人が行けるように、交代にしている。		
16		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホーム部会による親睦会や研修に参加するよう努め交流を深めている。現在、電話連絡などの交流もある。		
<b>Ⅱ.安心とru</b>					
17		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	ご本人の希望・ご家族の思いを聞き、毎日実現できるようケアプランに取り組んでいる。		
18		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	ご本人の希望の他、ご家族の思いをくみ取りプランに反映させている。毎月のたかみ便りの他遠方の方には写真を送ったり電話連絡も行っている。		
19		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居前の面談を行い、ご本人・ご家族の希望を聞きプランを立てている。そのプランに添ってケアを行っている。		
20		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	ご本人の出来る作業を見極め野菜の皮むき・洗濯物たたみ・干しなどあらゆる家事にも参加して頂いている。		
21		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	気軽に面会において頂ける様務めている。又、病院受診などは出来る範囲でご家族にお願いし絆を深めている。		

R2.8自己・外部評価表(GHたかみ)確定

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22	(11)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	知人・友人などの面会にも対応している。 又、電話なども使って頂き関係の継続に努めている。	家族の面会や外出、一時外泊に加え、近隣の方や知人などの訪問なども多く、これまでは自由に受け入れていたが、コロナウィルス感染拡大の懸念もあり、面会の際もモニターを通したり、外出自体を控えるなど、制限せざるを得なくなっている現状があり、利用者のストレスにつながっているケースも見られている。その中で職員は、収集している情報(昔の仕事や住まい、よく行った場所など環境のことなど)から話をするようにしている。馴染みの事柄との結びつきの継続は、刺激の誘発にもつながると考え、今後もできる範囲での支援を図る。	
23		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者様・職員が一緒に過ごせる様に配慮している。独りにならない様務めている。		
24		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	終了後のご家族との関係性が続いており、季節の果物を頂いたり施設で必要な物を持参して頂いたり良い関係が続いている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
25	(12)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者様の要望や思いを把握できる様、会話の時間をとっている。ご自分の思いを表せない利用者様にはご家族に情報を聞く様にしている。	利用開始時に、関係施設などからも情報を頂きながらアセスメントを取得(事業所独自のアセスメントシートを使用)する。利用者ごとに担当者を決めて半年ごとに見直し、その際にはカンファレンスで取り上げることで他の職員からの意見も取り入れている。職員は会話や日常生活の中で、利用者各自の思いの把握に時間を割いているが、表出の難しい利用者においては家族に尋ねるなどしている。	
26		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	面談・アセス・モニタリングで得た情報を元にご本人の生活に合わせたペースで過ごしてもらっている。出来ることは手伝ってもらっている。		
27		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	利用者様の既往歴を把握し、無理にならない様に過ごしてもらおう。本人の希望で屋外に出るときは職員が付き添っている。		
28	(13)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ケアカンファを毎月実施。担当職員・ケアマネを中心に全員で意見交換を行い、ケアプランを作成している。	毎月カンファレンスを開催、基本的にはケアプランは半年で見直すが、必要があれば随時行う。担当者はアセスメント、ケアプラン実施のモニタリング、居室整理、家族への連絡などを担う。毎日のプラン実施チェックもあり、全職員が全利用者分のプランを把握してサービスできるように共有している。担当者会議時には主治医や家族にも参加を求め、難しい時は意見の照会を行っている。	

R2.8自己・外部評価表(GHたかみ)確定

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ケース記録の改善などを行い、見やすく記入しやすい様式を採用し情報共有しやすいようにしている。		
30		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	周囲の病気などの状況を見ながら定期的に理容などの訪問をしてもらっている。		
31		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	文化祭やもちつきなどの地域の方々に施設に訪問して頂けるように努めている。また地域で文化祭などがあると作品の提供などを行い参加するようにしている。		
32	(14)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	ご家族の送迎の協力を受けながら支援している。提携医がいくつかあり、希望する場合は往診を受けられる。他科受診の際は原則ご家族の送迎によって通院しているが必要な場合は事業所が支援したり同行もしている。ご家族が通院した場合は情報の聞き取りを行い記録している。	元々のかかりつけ医(外部)を継続するか、事業所が提携している複数の病院に切り替えるか、利用開始時に選択することができる。外部医師(現在1名)の場合は、健康状態や残薬状況などの情報提供は事業所で行うものの、基本は家族支援での通院としている。提携医の場合は医師による訪問診療がなされる他、看護師も訪れるケースがある。受診に関する情報は事業所内で全職員が共有している。	
33		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	毎週土曜日に医療提携で看護師が来るので状態の報告・相談をしている。		
34		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には介護添書を渡すなど、情報交換に努めている。		
35	(15)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	年齢も高くなってきている方も多くおられ看取りも行っている。看取り方針がありこれまで幾例か看取りを行っている。必要時にはご家族にも説明し同意を頂いている。希望があれば最後まで支援する方針で提携医や訪問看護とも連携をとっている。	希望があれば最期まで支援する指針があり、昨年は2名の看取りを行っている。利用開始時に希望を確認、さらに重度化・終末期を迎えた際に主治医とともに家族に説明のうえ、書面による同意のもと対応する。提携病院の中には24時間対応の所がある他、訪問看護師との連携も行う。看取りに関しての外部研修にも出席し、内部での伝達も行っており、併せて管理者は職員のメンタル面の変化についても考慮している。	

R2.8自己・外部評価表(GHたかみ)確定

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
36		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	2年に1回を目安に救急救命法の訓練を行うほか夜間に救急搬送が必要になったときに備え宿直制度を取り入れ緊急時の初期連絡法を確認している。		
37	(16)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	半年に1回避難訓練を行い運営推進会議で地域の方にも参加を促して協力を求めている。年2回の防災訓練を行い内1回は消防署立ち会いのもと避難・消化・通報の総合訓練を行っている。最近水害への警戒も強めており運営促進会議の齋にどのように避難するか地域の方の協力が得られるかなど確認している。	年2回の訓練のうち1回は消防署が参加、夜間の火災を想定したものが多いが、水害(数年前の朝倉の豪雨の際、事業所が高台にあつて難を逃れた経緯あり)への警戒も考慮している。家族の参加はあるが、地域の方の参加(呼びかけは行っている)はない。マニュアルや防災マップの整備、備蓄物の確保を行っている。当事業所が、万一の場合の地域の避難場所に指定されている、と聞く。	地域の避難場所として提供もされているので、訓練に関しても地域の方の協力を頂いたり、地域としての防災訓練の情報を収集したりしても良いのではないかと。
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
38	(17)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	尊厳やプライバシーに配慮した言葉かけに努めている。年1回の人権学習を行うほか定例会の際、入居者に対しての尊重や言葉かけの内容などを注意しあい、ケアの振り返りを行っている。	声掛けや言葉かけ、方言の使用なども含めたコミュニケーション、接遇のマナーに関して研修を行い、また日常的に幹部職員から、または職員相互にて、注意喚起を行っている。お便りやパンフレットでの写真の利用に関しては、家族から書面で同意を得ている。	
39		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人の思い・希望を聞き入れ支援している。		
40		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人一人のペースを考慮し、希望に添える様に努力している。		
41		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	その人らしい身だしなみを本人の希望に添える様支援している。		
42	(18)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	楽しい食事を心がけ配色なども考え工夫している。食材は配送などを使用している。ご入居者に合わせた形態で食事提供をすることと楽しい食事を心がけ食事摂取ができるよう努めている。	これまで数回パターンを変えてきたが、4年前からはメニューと原材料のみが届き、内部で職員が調理する形に切り替えている。利用者も、野菜の皮をむいたり、もやしの根を取ったり、といった準備や片付けを一緒に行う。嗜好(代替を用意する)や、食事形態(ペースト状等)、療養食(減塩等)への対応もできる。職員も同じ時間に同じ物を一緒に食べて会話にも参加、食事が楽しいひとときになるように努めている。新型コロナウイルス感染拡大の懸念もあつて外食は控えているが、テイクアウトの利用は行っている。	

R2.8自己・外部評価表(GHたかみ)確定

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事の摂取量・水分量のチェックを毎日行っている。一人一人のリズムに合わせ必要なら食事の時間をずらすなどの工夫をしている。		
44		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	義歯の洗浄・口腔内の残物のチェックを行っている。また個人の状態に応じて訪問歯科も取り入れている。		
45	(19)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	時間を決めてトイレ誘導を行っているほか、その人の状態に合わせて布パンツや紙オムツで対応している。ケース記録内に排泄のチェック欄もあり自立した方には後で聞き取りを行い管理をしている。介助が必要な方にはパターンを把握して声かけや排泄介助を行い、失敗した際にも周囲に配慮してその方の尊厳を守るようにしている。便秘の際も医師の指示を仰いで対応している。	排泄チェックシートをユニットで共通の様式に切り替え、記載を行っている。失禁時もプライバシーに配慮して対応している。トイレは各ユニットに2ヶ所で、うち1ヶ所には介助に十分なスペースがある。ポータブルトイレの使用もある。	「排泄チェック表」の様式を改めて、職員の日常的な記載の手間の省力化にはつながっているが、排泄以外の事も記載することで、逆に、各利用者の排泄パターンや習慣を書面では理解しづらくなっている。本来のチェック表の目的、利用者の状況を考慮して、トイレ排泄に向けた改善の材料となるようなチェック表の利用を望みたい。
46		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分補給をこまめに行うことや体操への参加の声かけを行い腸の運動を促している。それでも出ない場合はDrとの連携をとり下剤なども使用している。		
47	(20)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴は基本月曜から土曜に行い、入居者の状態や意向、体調のバランスを鑑みて入浴を行っている。	各ユニット共通の造りで、やや広めの家庭用ユニットバス。基本的にはそれぞれ週2～3回だが、希望や汚染時には随時対応している。拒まれる方には時間や職員を変えて改めて誘い掛けるようにしている。柚子や菖蒲湯など行事浴の提供もある。脱衣室には暖房も整っている。プライバシーにも配慮しながら入浴を楽しんでもらっているが、同時に皮膚疾患など身体観察の場としても役立てている。	
48		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	一人一人の生活パターンを考え日中でも居室などで昼寝をして頂いたり、夜間もその方の意向に沿い安眠できるように努めている。		
49		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬は職員で確認し合い事故防止に努め、気になることがあればDrや薬剤師に相談・指示を受けている。		
50		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	個々の状態に合わせて外出やレクリエーションを行っている。		

R2.8自己・外部評価表(GHたかみ)確定

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51	(21)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	散歩などの要望があれば、本人の希望によりそって支援している。外出の希望があり、スタッフ対応が難しい場合は家族に協力をお願いすることもある。	新型コロナウイルス感染拡大の懸念もあって、外出レク(花見やドライブなど)にも制約が生じているのは確かで、買物も職員だけで行っている状況にある。自然にも囲まれている環境にあるため散歩を楽しむことはあり、軒先でちょっと日光浴をしたり、事業所の横を走る電車を眺めたり、事業所の庭の季節の果物(ピワ、サクランボ等)を収穫して食べたりもしている。状況が変われば外出を楽しませたいと職員は思っている。	
52		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	ご家族より小口現金を預かり、基本的にはスタッフが金銭管理をしている。どうしても自分のお金が必要との要望があれば、紛失しても大丈夫なくらいのお金を持っている方もいる。本人の希望があれば、購入の手助けをするようにしている。		
53		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	希望があれば、家族に了解をとって電話をする支援をしている。なかには携帯電話を持っておられる方もいる。家族からのハガキや年賀状のやりとりの支援をしている。		
54	(22)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節に合わせて飾りつけを行っている。西日があたり、トイレがとても暑くなるので、扇風機を設置するなどして、温度の調整をしている。	2階建てで1・2Fにユニットが分かれており、概ね造りは共通。ホールを中心に居室が配置され、スタッフルームもホール内に内接してほぼ見渡せる。南面に掃き出し窓があり、眺めも良く、日光も差し込み明るい。花を飾ったり、作品を貼ったり、と賑やかな雰囲気の中で、季節感が感じられる。居室とホールとの行き来もしやすく、思い思いの場所でゆっくり過ごされる。内周をめぐって周回した歩行訓練も行える。	
55		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	フロアの2カ所にソファを設置している。1つはテレビ前で、みんなと過ごすことができ、もう1カ所はその反対側の入り口においているので、1人で過ごすことができるようにしている。		
56	(23)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居時に今まで使っていた筆筒などをお持ち下さいとお知らせして、家族の写真を飾りつたり重い思いに部屋を工夫しながら使ってもらっている。	各居室は収納を含め8畳ほどの広さで、基本は畳敷きの和室仕様だが、フローリングへの変更もできる。入口にはユニットごとの名前(柿、梨)をあしらった木の表札があり、暖かみを感じられる。木調の介護ベッド、エアコン、広めのクローゼットが備えられ、テレビ・筆筒・家族の写真などをはじめ、使い慣れた物や馴染みの物を自由に持ち込んでいる。職員は、日頃の掃除に加え、安全に移動できるようなレイアウトにも気を配っている。落ち着いて過ごせるような配慮がなされている。	
57		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	フロアや居室、トイレなど各所に手すりがあり、トイレの場所がわかるように、案内する張り紙をつけている。		